

「高崎プライド」 ～心と形を整える～

令和2年12月11日(金) NO19 文責 木下 文秋

「^{いのち}生命のこえ」コンテストから

公益社団法人「みやざき被害者支援センター」から学校に郵送されてきた「生命のこえ」コンテストの作品集の中から、ハートに伝わる一行詩を皆さんに紹介します。

○いのちがなくなったらたのしいことができなくなる。

虫をつかまえることがたのしい。虫はもとにもどすんだ。(木花小2年)

○お兄ちゃんは短気だ。でも、家で遊んでいるといつもあぶないものがないか心配してくれる。

命は一つしかないから。(吾田東小4年)

○会ったこともない、話したこともない。それでも悲しいニュースに胸が痛くなる。

同じくらいの若い人の死(日南学園中1年)

○僕を忘れる祖父に誕生日を教えた、僕の名前を教えた。

笑った祖父は優しく僕の名前を呼んだ。涙がこぼれた。(宮崎西校附属中1年)

○祖母のお見舞いに行った。懸命に息をしながら自分と闘っている。

祖母の生きたいという気持ちに涙が出た。(生目南中3年)

○人という字は表面では支えあっているけど、影では右の人ががまんしている。

それに気づける人に僕はなりたい。(宮崎西校附属中1年)

○「生」の読み方はいくつもある。でも「死」の読み方は1つだけ。

死は1通りしかないけど人「生」は何通りもある。(小林高校1年)

○亡き父の面影が残る私。いろんな人から姿と性格と仕草が似ているといわれたとき、

父が少し笑った気がした。(佐土原高校1年)

○僕は発達障害で苦勞はしているけど不幸ではない。

そして、こんな形で生んでくれた母には感謝している。(日南学園高校1年)

○家に帰ると、たくさんの警察と一台の救急車

朝の送り迎えでいってきますの一言を言わなかった私の後悔(高千穂高校3年)

○母さん、あなたの命を守りたい。だから、ごめんね。

施設の窓越しから電話なの。本当は手を握りたいのに。(西米良村一般)